



「初夏の面河溪」

天真

人びとの仕合わせのために……天真会教団

320号

令和7年7月1日発行

宗教法人 東洋最高道德学会

夏の朝に

○早緑の木の間に立ち潜く 郭公の
 ○わが庭の木の群の中に 郭公の
 ○郭公の 声の響もす この森に
 鳴きとよむなり 夏のあしたに
 いつか来鳴かむ 山ほととぎす

前会長 故長岡 悟

今月のことば



宗教法人 東洋最高道德学会
 医療法人 天真会

名誉総裁
 伏見 博明 殿下

天真 320号

目次

今月のことば『夏の朝に』
 前会長 故長岡 悟

- 01 ——— 天真聖典略解
前会長 故長岡 悟
- 04 ——— 神木考（一）
前会長 故長岡 悟
- 06 ——— 山びこの賊 第48回
加藤 恵一
- 08 ——— 田窪さんのぶら〜り山歩き
- 10 ——— 天真俳壇

題字：前会長 故長岡 悟／表紙：『初夏の面河溪』



医療法人 天真会

〒791-1112 愛媛県松山市南高井町333 TEL(089)976-7777

- 南高井病院
- 南高井デイサービスセンター
- 小規模多機能ホームつよし
- 南高井病院介護医療院
- 南高井訪問看護ステーション
- みなみの杜デイサービスセンター
- 地域連携室
- 南高井ホームヘルパーステーション
- サービス付き高齢者向け住宅みなみの杜
- 南高井居宅介護支援事業所
- 小規模多機能ホーム南高井

天真聖典略解

②

天真禱詞 Ⅱ 古事記 Ⅱ

みおしえのてほどき
前会長 故長岡 悟

古事記

古事記は、今から約一三〇〇年ほど前に、元明天皇が「王化の鴻基と邦家の経緯」を明らかにするために、太安萬侶に詔してつくられたものです。古事記の上巻は単に歴史を記したのではなく、天地、自然、宗教、と人間の根本問題に対する古代日本民族の考え方を叙述しています。そしてあらゆる階層の人が其味をもち、しかも確実に後世に伝誦してゆくために、説話的に編纂していることに深い意義があります。

この空想的ともいえる説話の中にかくし絵のように、史実があり、世界観があり、万教の原点である神道の神髄が秘められています。

原典は漢字による音訓交用ですが、大変格調の高い文体ですので、成可く原典に近いものとして譯しました。

また、本居宜長は古事記を「ふることふみ」と読ましています。今では古事記が通説ですが、私は「ふることふみ」が適当と解しますので「古事記」として本教団の中心としています。「読書百遍意おのずから通ず」といいます。くり返しお読み下さい。文意がわかるとともに、身も心も洗われてすがすがしい境地となります。

それは、これを誦むとき簡潔な文章の中に、格調高く全編を通じて、言霊が鳴りひびき、誦む人をして悠遠の惟神の境地に誘い、宇宙の大元霊、天の御中主神に感応し、帰一せしむる霊能力があるからです。

その意味においても、この聖典に宿る民族精神こそ、祖孫を一貫する日本民族の永遠の生命でもあります。

「岐美の聖婚」

○美斗能麻呂波比（結婚）
需要供給・充足調和の徳
○左廻り右廻り・宇宙の
法則 大自然への帰一の
徳○水蛭子・淡島誕生・
悪因悪果

「岐美の聖婚」

ここに其の妹伊耶那美命に問いて曰し
しく、汝が身は如何にか成れると、答えて我が身は成り成りて、成り合はぬところ一処ありと。伊耶那岐命詔らししく、我が身は成り成りて、成り餘れるところ一処あり。故、この吾が身の成り餘れる處を、汝が身の成り合はぬ處に刺し塞ぎて、国土生み成さと思ひうかに。伊耶那美命答へて曰ししく、然善けむと。伊耶那岐命詔らししく、然らば、吾と汝とは是の天の御柱を行き廻り逢ひて、みとのまぐはひせむと、かく期りて、乃ち詔らししく、汝は右より廻り逢へ。我は左より廻り逢はむ。とのらして、約り竟へて廻りし時に、伊耶那美命先づ、あなにやしえおとこを。といひ、後に伊耶那岐命、あなにやしえおとめをと、各言ひ竟へし後に、その妹に告りて言ひしく、女人先づ言へるは良くあらずと、然れども隠處におこして生みたまへる子は、水蛭子。この子は、葦船に入れて流し去りき。つぎに淡島を生みたまひき。是も子の数に入らず。

「大八島生成」

「大八島生成」
国生みの事○淡道之穂之
狭別嶋（淡路島）
○伊予之二名嶋（四国）
○愛比売（伊予）
○飯依比古（讃岐）○大

ここに二柱の神議りて云ひしく、今わが生める子良からず。猶天つ神の御所に日すべし。といひて、すなわち共に参上りて、天つ神の命を請ひたまひき。ここ

宜都比売（阿波）
○建依別（土佐）○隱岐
之三子島・天忍許呂別
○筑紫の嶋（九州）○白
日別（筑紫）○豊日別（豊
の国）○建日別（熊曾）
○天比登都柱（伊岐の島）
○天之狭手依比売（津嶋）
佐渡之嶋○天御虚空豊秋
津根別（大倭豊秋津嶋）
○建日方別（吉備の児嶋）
○大野手比売（小豆嶋）・
大多麻流別（大嶋）天一
根（女嶋）・天之忍男（知
訶の嶋）天両屋（両児の
嶋）

に天つ神の命以ちて、布斗麻爾トへて詔
りたまひしく、女の先立ち言へるに因り
て良からず、亦還り降りて改め言へ。と
故ここに降りまして、更に天の御柱を往
き廻ること、先のごとし、ここに伊耶那
岐命、まづあなにやしえおとめをといひ
後に妹伊耶那美命、あなにやしえおとこ
をと。かく言ひ竟へて、御合ひて、子
淡道之穗之狭別嶋を生みたまひき。つ
ぎに伊予之三名嶋を生みたまひき。この
嶋は身一つにして面四つありき、面ごと
に名あり。故、伊予の国を愛比売と謂ひ、
讃岐の国を飯依比古と謂ひ、粟の国を大
宜都比売と謂ひ、土佐の国を建依別と謂
ふ。つぎに隱岐の三子島を生みたまひき。
またの名は天忍許呂別。つぎに筑紫の嶋
を生みたまひき。この嶋また、身一つに
面四つありき。面ごとに名あり、故、筑
紫の国を白日別と謂ひ、豊の国を豊日別
と謂ひ、肥の国を建日向日豊久土比泥別
と謂ひ、熊曾の国を建日別と謂ふ。つぎ
に伊岐の嶋を生みたまひき。またの名は
天比登都柱と謂ふ。つぎに津嶋を生みた
まひき、またの名を天の狭手依比売と謂
ふ。つぎに佐渡の嶋を生みたまひき。つ
ぎに大倭豊秋津嶋を生みたまひき。また
の名は天御虚空豊秋津根別と謂ふ。故、
この八嶋のまづ生れしに因りて、大八嶋
国と謂ふ。
然して、後、還りますとき、吉備のの

「神々の生成」その壹

○大事忍男神・国生みの
大事をした神○大天屋の
神○石土毘古神・家の材
料の神 ○石巢比売神・
石と砂の神○大戸日別
神・門と扉の神○天之吹
男・屋根をふく神○大屋
毘古神・屋根を守る神○
風木津別之忍男神○大綿
津見神・海の神○速秋津
日古神○速秋津日売神河
口の夫婦神で潔祓の神で
もある。

「神々の生成」その貳

○沫那芸神・沫那美神・
流水の神○類那芸神○類
那美神・静水の神○天之
水分神○国之水分神・分
水嶺の神○天之久比奢母
智神○国之久比奢母智

児嶋を生みたまひき、またの名は建日方
別と謂ふ。つぎに小豆嶋を生みたまひ
き。またの名を大野手比売と謂ふ。つぎ
に大嶋を生みたまひき。またの名は大多
麻流別と謂ふ。つぎに女嶋を生みたまひ
き。またの名を天一根と謂ふ。つぎに知
訶の嶋を生みたまひき。またの名は天忍
男と謂ふ。つぎに両児の嶋を生みたまひ
き。またの名は天の両屋と謂ふ。

「神々の生成」その参

既に国を生み竟りて、更に神を生みた
まふ。故、生みたまふ神の名は、大事忍
男の神。つぎに石土毘古の神を生みたま
ひ。つぎに石巢比売の神を生みたまひ。
つぎに大戸日別の神を生みたまひ。つぎ
に天之吹男神を生みたまひ、つぎに大屋
毘古神の神を生みたまひ、つぎに風木津
別之忍男神を生みたまひ、つぎに海神を
生みたまひ、名を大綿津見神。つぎに、
水戸神、名を速秋津日子神、つぎに妹速
秋津日売神を生みたまひ。

「神々の生成」その肆

この速秋津日子、妹速秋津日売の二神、
河と海とに因りて持ち分けて生みたまふ
神の名は、沫那芸神。つぎに類那芸神、
つぎに類那美神。つぎに天之水分神、つ
ぎに国之水分神。つぎに天之久比奢母智
神、つぎに国之久比奢母智神。

神・万物に水を与へる神

「神々の生成」その参

○志那都比古神・風の神
○久久能智神・木の神
○大山津見神・山の神
○鹿屋野比売神（野惟神）・野の神

「神々の生成」その四

○天之狭土神・国之狭土神・土地の神
○天之狭霧神・霧の神
○天之闇戸神・国之闇戸神・溪谷の神

「神々の生成」その五

○鳥之石楠船神（天の鳥船）・船の神・飛行機の神
○大宜都比売神・穀物の女神
○火之炫昆古神（火の迦具土神）・火の神・秋葉神社の祭神
○金山毘古神・鉾山・古神
○金山毘女神・鉾山・治金、陶工、農耕の神
○波邇夜須毘古神
○波邇夜須毘女神・陶器の材料粘土の神
○弥都波能売神・灌溉用の水の女神

「神々の生成」その参

つぎに風の神、名は志那都比古神を生みたまひ、つぎに木の神、名は久久能智神を生みたまひ、つぎに山の神、大山津見神の神を生みたまひ、つぎに野の神、名は鹿屋野比売神を生みたまひき、またの名を野椎神と謂ふ。

「神々の生成」その四

この大山津見神、野椎神の二神、山野に因りて持ち別けて生みたまふ神の名は、天之狭土神。つぎに国之狭土神、つぎに天之狭霧神、つぎに国之狭霧神、つぎに天之闇戸神、つぎに国之闇戸神、つぎに大戸或子神、つぎに大戸或女神。

「神々の生成」その五

つぎに生みたまふ神の名は、鳥之石楠船神、またの名を天鳥船と謂ふ。つぎに大宜都比売神を生みたまひ、つぎに火之夜芸速男神を生みたまひき。またの名は火之炫昆古神と謂ひ、またの名を火之迦具土神と謂ふ。この子を生みたまひしに因り、美蕃登灸きて病み臥せり、多具理邇に生まれし神の名は、金山毘古神、つぎに金山毘売神。つぎに尿に成りませる神の名は、波邇夜須毘古神、つぎに波邇夜須毘女神。つぎに尿に成りませる神の名は邇都波能売神。つぎに和久産巢日神。

豊宇氣毘売神・穀物を司る女神・伊勢神宮外宮の祭神

「伊邪那岐命神避り」

美神神避りにより神々の生成の事

○泣澤女神

悲歎に泣くを救う神・

○根折神・根折神

岩石をも斬り裂く

○石筒男神

霊能をもつ神（雷神）

○剣の神（雷神）

○甕速日神

強盛強烈な神

○樋速日神

火の燃えさかる神

○建御雷之男神

勇猛な雷電の如き神、

刀剣の霊神

○閼添加美神

閼添津羽神

○閼添津羽神

溪谷の龍神（水神）

この神の子は豊宇氣毘売神と謂ふ。故、伊邪那美神は、火の神を生みたまひしに因り、遂に神避りましきなり。およそ伊邪那岐・伊邪那美の二神・共に生みたまふ嶋壹拾四嶋、神参拾伍神。

「伊邪那岐命の神避り」

神々の生成の事

故、ここに伊邪那岐命に詔りたまわ

く、愛しき我が那邇妹の命を子の一本

に易えつるかもと謂いて、御枕方に匍匐

い、御足方に匍匐いて哭きたまう時に、

御涙に成りませる神は、香山の畝尾の木

のもとに坐す、名は泣澤女神の神。故、そ

の神避りたまひし伊邪那美神は、出雲国

と伯伎国との堺なる比婆の山に葬めまつ

りき。ここに伊邪那岐神、御佩の十拳の

剣を抜きて、その子迦具土神の頸を斬り

たまひき。ここにその御刀の前に著ける

血、湯津石村に走りつきて成りませる神

の名は、石折神。つぎに根折神、つぎに

石筒男神。つぎに御刀の本に著ける血も、

湯津石村に走りつきて成りませる神の名

は、甕速日神。つぎに樋速日神。つぎに

建御雷之男神。またの名は建布都神。ま

たの名は豊布都神。つぎに御刀の手上に

集る血、手俣より漏き出て成りませる神

の名は、閼添加美神。つぎに閼添津羽神。

上の件、石折神より下、閼添津羽神よ

り前、併せて八神は、御刀に因りて生り

ませる神なり。

古来神木として、カシ、オガタマ、サカキ、マサキ、ツルマサキ、ツバキ、タブノキなど数多くあるが、桂は神々が降臨し給う霊木として、古事記や日本書紀にも何例もあり、いずれも降神の憑代としてに、注目して考察して見たい。

平凡社の世界百科大事典によると、「桂は山地に自生する落葉大高木で、葉の裏が粉白色を呈して、細長い枝の両側に葉が美しく並び、幹は一米以上に達し、木の皮は縦に裂ける。葉は細長い枝で対生し、広卵形、長さ二・二五㎝で、へりには細かい波形のざざざがある。」

雌雄別株で、四・五月ころ葉に先だって葉腋に小さい花が咲き、雄花には多数の雄しべがあり、葯は線形で紅色、雌花には淡紅色の糸状の柱頭がある。

実は三・五個、円柱形で長さ十五耗ばかり、日本の特産で、材は建築、楽器、器具、製図版などとし、葉は抹香の原料となる。」

と、記されている。この桂が我国最古の文献である、古事記に最初に見える記事は、古事記上巻の「葦原中つ国の平定・天若日子」の条に、「故爾鳴女、自天降到、居天若日子之門湯津楓上而、言委曲如天神之詔命。」

神木考 (一)

= 降神の霊木かつらの木 =

前会長 故 長岡 悟



とあり、雉子の鳴女が、天若日子の門の前にある、神聖な桂の枝にとまり、天津神の詔をくわしく申し伝えた、ということが書かれている。

第二には「日子穗穗出の命、わたつみのいるこの宮」の条に、「故、随教少行、備如其言、既登其香木以坐。」と、あり、火遠理命は塩椎神の教えしままに行くと、その言葉通りであったので、わだつみのいるこの宮の門の前にある、泉のほとりの神聖清浄な桂の木に登り坐した、これもやはり、降神の依代としての神木として記されている。

日本書紀にも同じ意味をもって、六例にわたって記されているが、いずれも神の降臨する神聖な霊木としている。

ここに、名古屋市在住の植物学者杉原信司氏の調査による現在全国にある桂の名木と、その木にまつわる伝承や由来を列記して見た。

国指定天然記念物

海潮の桂 株立周囲一九米

高さ三十米の樹令千年余

島根県大原郡大東町

日原神社所有

国指定天然記念物

竹崎の桂

株立周囲十五米

高さ三十米 樹令千年

島根県横田町竹崎
竹崎神社所有

この竹崎の桂は、古くから神木とされ、素戔鳴命が八俣大蛇を退治して、天叢雲剣を得た地と伝えられている。

市指定天然記念物

鉢伏山の桂

株立周囲七米七十釐

樹令三百年

敦賀市阿曾原鮎ヶ谷
敦賀市所有

この桂も昔から神木とされ、地元では「お桂さん」と呼び、崇敬されている。

県指定天然記念物

白山神社の桂 株立周囲一三米

七〇釐 樹令千年

福井県大野市下打波

白山神社所有

標柱に「泰澄大師が白山巡錫の折、食事のあと、この地にさした箸が生育したのが、この桂と伝えられる。現在この神社の神木として保護されている。」と、

泰澄大師とは、白山の開祖で養老年間の人。ここで注目すべきは、桂の木のみならず、五・六トンの巨岩が六個ばかりころがっているところである。地元の人に聞くと山から落ち

てきたのだろうという。桂の根本には湧き水で小さい池ができています。出雲の「海潮の桂」の附近には「鏡の岩」だけでなく、多くの岩石が積み重なっている。清水が湧く池を井泉にみたてれば、同じような祭祀場があったことが推測される。桂と井泉と岩石の組合わせは、古事記の神話の世界である。

(この記事は「古代から中世」杉原信司著より抜粋)

県指定天然記念物 仙人谷の桂

株立周囲十八米
高さ三十米 樹令千年
敦賀市瀬河内 敦賀市所有

この桂の根本に祠があり、神木として尊崇されている。桂の近くには大きな岩があり、これを的岩といい、昔天狗がこの岩の上から谷の向うの山を的にして、弓を引いたといわゆる伝説があるという。

蛭の宮の大桂

株立周囲十一米
福井県丹生郡宮崎村
蛭の宮所有

この桂も神木で、社殿も拜殿もなく、石灯笼が両側に立っていて、桂の木がご神体で、しめ縄が張っている。

村指定天然記念物 今山田の桂

株立周囲十五米
高さ三〇米 樹令千年
富山県婦負郡山田村今山田 牛嶽神社所有

以上が、杉原氏の調査にかかる桂の木の名木があるが、東北、北海道にも国、県指定の天然記念物の桂の巨木があるが、大きさは大同小異である。最後にわが教団所有の大桂を紹介する。

愛媛県指定天然記念物 初瀬の桂

株立周囲二十九米
高さ四十米 樹令千年余
愛媛県上浮穴郡面河村大成 天真会教団所有

この桂は、明治三十年筆者の祖父、中川梅右衛門清仲(通称初次)が、初次の初字に因みて「初瀬の桂」と名付け、当時すでに日本一を誇っていたようである。

明治四十二年十一月二十日海南新聞の田中蛙堂氏らによる「面河探勝団」が、面河で最初に観光したのが、この桂である。その探勝記に、

「樵路大成部落に向ふ、此辺一帯山高く水清しくして山姿水態人の神思を清らかしむるものあり、晩秋すでに逝きて巖角を抱ける楓樹皆紅を脱し、吹く風凜として己に初冬の感(中略)十一時大成に至り、同地の青年団並びに教師中川相次郎(筆者実父)高岡宗太郎、竹本好藏其他有志諸氏の歓迎会に臨む、大成は洪草

より道程一里所謂大成山腹にある一小部落にして、殆ど別世界を為し居れり、この地に有名な桂あり、樹幹柘植の如く枝は槐に似、葉は楓葉に類す、夏季の候梢頭に紅き花を飾るといふ、高さ二十余間、其の大きなもの十六而して、其小なるものに至つては其数幾十株なるを知らず、いづれも同一基株より出でて樹株の周囲百数十間、一株にして小森林を形成し居れり、聞く近時此の處に大成公園を設くるの議ありと、午后一時三〇分同地を辞し、二時大成の風穴を見る。」と。

【続く】



『わだつみのいるこの宮』 青木 繁

山びこの賦

第48回
著 加藤恵一

「ついでは大勢で移住すれば目立ってしまう。まずわれら一家だけでその地に行く。皆はこの地に

残るもよし、道後より参った者は道後に帰るもよからう。だが、ふたたびわしが旗上げするおりには馳せ参じてくれい」

誰ひとり声を発する者もなく、悲痛な空気があたりを支配した。

「いや、殿おひとりでは百姓はできません。さいわい、拙者は代々この山郷に住み、百姓にはことのほか詳しうござる。これまでのご恩報じにそれがしが御指南つかまつる」

沈黙を破って菅弥五右衛門が言った。やけに昂然とした口調である。

「そうか。それはかたじけない、それでは、そちの世話になるか」

主膳正は苦笑しながらうなずいていた。

軍資金の一部が、道後へ帰る者をはじめ、全員にくばられた。主に、銭と丁銀である。残りは、武器とともに隠匿した。

一行が猪伏を後にしたのはもう九月になっていた。二十三歳の青年武士主膳正が猪伏に来てから三十一年の年月がながれている。主膳正はすでに五十二歳、妻知津もそろそろ老境に入り、このところ、なにかと病弱きみであった。

道案内には木地屋小平太がたった。根がこの山郷の木地職だけに地理にくわしい。だが、なんといっても虚弱な女づれである。めったに人も通らぬ難路を、休みやすみ、五日をついやして若山に着いた。

このあたりは面河川の上流である。この川は伊予の山間を縫うようにして流れ、土佐に入ると仁淀川とその名が変わる。

「この川を少し下ったところに、ちよつとした平地がござる。南に面し、一日じゅう陽がさして、風水害のすくない好地とぞんずる。その地を拓いて住まわれるがよろしゅうございましょう」

菅内蔵之丞が推奨するだけに、そこは水清く、山姿のやさしい絶好の地であった。

さつそく、住まい作りがはじまった。いそがねば、山の冬は早いのだ。

主膳正と嫡子の義清、二男の清房、そして百姓指南の菅弥五右衛門がかろうじて暮らせるほどの小屋が年内に建った。

ちようどそのころ、その侘住^{わひず}まいに一人の客がおとずれた。大野直昌の旗本高岡市右衛門であった。浪々の行く末を相談にきたのである。

主膳正は、

「主家が滅んではいたし方もござらぬ。ここでわれらと共に百姓をなされては」

とすすめ、高岡市右衛門は弟の八左衛門と、その地で帰農することになった。

年が明けた。はじめ、掘立小屋であった住まいもしいに人の家らしく整い、春には小さな畑も耕して、その秋、ごくわずかだが、穀物を手にすることができた。

それを見とどけると、木地屋小平太は、

「ひとまず木地職に戻りますが、事あるときは馳せ参じます」

といって、山の民の群れにもどっていった。

——小平太がいうように、ふたたび武辺を轟かす時期がこぬでもない。一度、あれだけしく揺れ動いた天下だ、そう簡単にはおさまるまい。

主膳正は強いてそう思った。

かつて、三坂峠を越えるとき、心中、部下たちに厚く報いてやらねばならぬ、と誓った日のことが、

しきりに思いおこされた。

——そうだ、戦旗と馬印を奉置する場所を作らねばなるまい。

主膳正は屋敷の裏に小さな祠をつくり、抱き柏の戦旗と、代々伝わる日の丸の金扇子をそこにおさめた。

（よし、以後この地を昼ノ野と名づけよう）

と、主膳正はおもった。

この地は南面していて、山峡の地には珍しく陽がよく当たる。そのうえ、日輪の象徴である中川家伝来の日の丸の馬印が安置されているので、終日、夜のない地であるからである。

昼ノ野、それは主膳正の開基した地である。

主膳正のほか、菅弥五右衛門、高岡市右衛門、同弟八左衛門、菅内蔵之丞、加藤長輔らも、それぞれ、面河川ぞいの好地を求めて、土地を拓いた、のちの大味川村^{おおみかわ}である。

因みにいうと、この六人は後世大味川村の開基として、大味川

六人衆と呼ばれることになる。

昼ノ野

主膳正が昼ノ野にきて二年目の天正十五年の夏は到来が早く暑かった。五月になるやいなや、山間の高地である昼ノ野に、それこそ真夏の昼の盛りのような太陽が照りつけた。

そして、その不順な天候が年来病弱^{さいな}きみであった知津の身体を苛み、五月をすぎたころから、知津は床に臥^ふせつたままになっていた。六月のなかば、山峡にゆうべの影がしのび寄り、斜陽が山の頂かがやかすころ、その知津の病床に主膳正があわただしく駆けこんできた。

【続く】

■ねことの生活

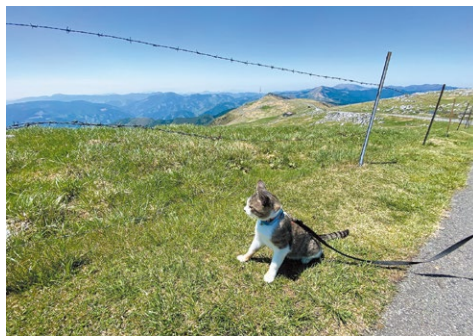
保護猫が来てから2カ月ちょっと。すれ違う職員の方々から「ねことの生活はどう？」などと、声を掛けてもらうことが多くなりました。その時は、「楽しいですよ！ 写真を見ます？」とか言っておりましたが、実際の猫との生活は、しんどいし、眠いし…でした。というのも、同居(?)生活が1カ月経った頃、右足のケガは治りつつあったのですが、青っぱなが鼻から常に出てる状態だったので、毎日、鼻水がついた衣類や毛布を洗い、その上、夜中・早朝に夜鳴きで起こされるを繰り返しておりました。

そして週末の金曜の夜に、事件が起こります。仕事から帰ると、唯一の観葉植物が絨毯の上でひっくり返され、土をかき回し、その中にう〇こまでしておりました。休み前だったので、久しぶりにゆっくりしようと思って帰ったのに、それから大掃除です。土を掃いて絨毯を洗い、フローリングを水拭きし、窓を外して窓枠に入り込んだ土を除去しました。気付いたら、夜の10時でした。さすがに怒りを猫にぶつける事はしませんでした。仕事の疲れと猫との生活疲れが入り交じり、1人で吠えながら片付けをし、早々と就寝しました。

当然、その間の猫は私の異様な雰囲気を感じ、キャリーバックの中に避難しておりました。翌日、かなり遅めの起床をし、猫のトイレ掃除をすると少量のピンクの猫砂があり、「猫砂がおしっこに触れると変色するけどピンク？」と思い、ネットで調べてみると血尿という事が判明(真っ赤ではないんです)。そして「元々腎臓が弱い猫にとっての血尿は、大病に繋がる可能性があるので早急に動物病院にて受診」と書いていたので、慌てて動物病院に向かいました。幸い、4日ほどの通院で回復しました(それ以降、血尿はしていません)

そのことを、同じ職場の先輩猫おじさん(数年前から猫を飼い始めた職員)に話すと、

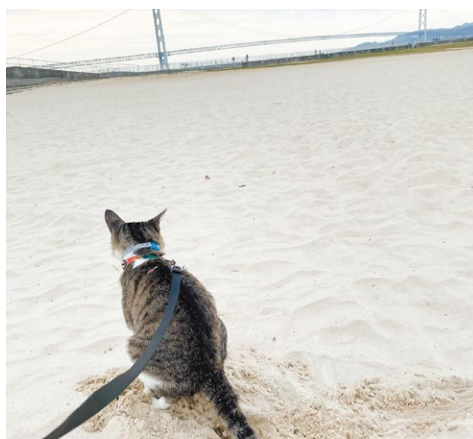
- ①必ず毎日1回以上はトイレ掃除と水の入れ替えをすること
- ②猫が逃げ込める暗い寝床や高い寝床のキャットタワーを作ること



初遠征は四国カルストでした



眠る時には必ず身体のどこかをくっつけて寝ます



砂がある所ではすんなりと、う〇こをしてくれるのも助かります。明石大橋が見える綺麗な海岸でしたが



神戸からの帰り、車酔いもせずに爆睡してくれるので、気が楽です



第八十歩

「ねことの共同生活」

気付いたらもう1年の半分が過ぎてしまいました。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。50や60歳などの節目を過ぎたら人生焦らず生きられると、人生の諸先輩が言っているのを見たり聞いたりしますが、私は未だ、夏休みが終わる小学生のように、「やばい！ もう半年終わってしまった！」っと、焦る日々を過ごしております。



寝ているものだと隣を見てみると、ヘッドレストを外した助手席に手を置き、かぶりつきで風景を見ていました



長距離移動中、短い間隔で休憩をとるのですが、それは運転手にとっても良いことだと思うのです



姉宅にて一日経つと、誰のネコ？と思えるほどリラックスして甘えておりました



初対面の姉2人に対し、人見知りの飼い主（私）がびっくりするほどの欧米人並みの挨拶をしました



焚火ネコ養成数回目、初めてゆっくりと焚き火を凝視しておりました。焚火ネコ完成です



男の一人暮らしで絨毯洗った事のある人は手を挙げてください。初めて私は洗いました

③爪とぎを置くこと

④ごはんは定時に設定し、不定期にあげないこと

⑤猫がいたずらしても決して怒らないこと

⑥猫がすることに喜びを感じるべし

⑦猫は幸福を与えてくれる動物だと思うべし

…など、最後は少し話を盛りましたが、なにやら新手の宗教の勧誘？と思えるような教をコンコンと説法され、少し反省致しました。絨毯の上に土をばら撒き、その上〇こまでしたのは、猫からのメッセージだったのだと。『私に試練をお与えくださいまして、なんてありがたい……合掌』と、思うようにしました。

■ともに、生きる。

私の少しずつのイライラが猫に伝わっていた結果、猫のストレスになり、大暴れ&血尿になったのかもしれません。それからは、毎朝、起きたら必ず猫のトイレと水皿の清掃。猫の遊び道具&キャットタワー、暗い寝床をDIY製作し、毎日最低10分は猫と遊ぶ。鳴いても気にしない（夜鳴きは話し合う）ように心掛けております。先輩猫おじさんの悟りの境地まではたどり着かないまでも、少しは猫にストレスをかけないようになったと思っています。

ちなみに、普段の生活は猫に気を遣っておりますが、私の趣味である旅や焚き火にも遠慮なく連れて行っております。しかし、遠距離移動（神戸まで行った）や、車中泊、焚き火は全て問題なさそうなのです。移動中や車中泊、焚き火中はいつも寝ておりますし、時折起きて、興味が無ければまた寝るという行動を繰り返しますし、帰ってからも体調が悪いようでもありませんから、アウトドア猫としてSNSにデビューする日も近いかもしれません。知らんけど（笑）。



天真俳壇

郭公の訝や奥嶺天霧らふ
梅は実に老いても深山暮しなほ
存へて聴く神奈備の昼河鹿
杳脱に閑守石の梅雨の冷え
梅雨鴉多聞櫓の屋根歩く
梅雨明くる縮笹生ふ登城道
風呼んで薬草園の蒲の穂は
薬草園木天蓼^{またたび}のはや枯兆す
薬草の説明言葉爽やかに
蛸の御霊鎮めの遠^{とほ}ちのこゑ
蛸のこゑに檜山のたたづまひ
石鎚^{いしづち}山を遥かに早稲^{わせ}の穂に立ちぬ

藤田ひろむ

宗教と文化 天真 (第320号)

年間購読料 3,000円

発行日 令和7年7月1日

編集人 泉田孝治

印刷所 岡田印刷(株)

発行所 宗教法人 東洋最高道德学会
愛媛県松山市南高井町338
TEL. 089-976-7777
FAX. 089-976-6622

=歯のことなら=



清水歯科

松山市東方町
TEL(089)963-1441



<アルゴ>
ARUGOセレモニーホール
ARUGO別館
松山市錦町6-3
TEL 089-915-1171

小倉聖苑 本町ホール

松山市本町7丁目471-1
TEL 089-917-5300

株式会社 小倉葬祭社 0120-330-119
松山市錦町6-3 ARUGO別館2F
TEL 089-933-3008 FAX 089-933-0167